

【対象】2001年6月から2007年12月までに大腸穿孔に対し手術を施行した50症例（男女比27：23，平均年齢70.8歳（33～98））。

【方法】年齢，性別，穿孔原因，基礎疾患の有無，術前経過時間，SIRS，術式，穿孔部位，限局性腹膜炎か汎発性か，術後合併症の有無により検討した。

【結果】穿孔原因は大腸癌に伴うもの13例，憩室炎29例，その他8例で穿孔部位は右側結腸13例，左側結腸および直腸37例だった。死亡率は20.0%だった。SIRS（ $p < 0.05$ ），限局性腹膜炎か汎発性か（ $p < 0.05$ ），術後合併症の有無（ $p < 0.01$ ）に有意差が認められた。またSIRSの24例中20例（83.3%）が汎発性腹膜炎で，死亡率は33.3%だった。

【結論】大腸穿孔し汎発性腹膜炎となった症例は予後不良だった。

7 当院における大腸穿孔性腹膜炎症例の検討

富山 武美・齋藤 義之・藤野 正義

厚生連豊栄病院外科

1997年1月1日から2007年12月31日までの11年間に当院で経験した。大腸穿孔性腹膜炎は17例であった。医原性の穿孔が7例あり，原発性の穿孔は10例であった。平均年齢はおのおの62歳，77歳であった。入院後24時間以内に手術が行われたが，術死例は3例あり，いずれも原発例であった。術死例を除く術後入院期間は医原性55日原発例は72日であった。医原性としては大腸内視鏡の粘膜切除時の他，内視鏡操作そのもの，用指のブジーによる物があった。原発性は悪性腫瘍の閉塞に伴う穿孔と憩室による穿孔がはい半ばした。

8 当科における大腸穿孔性腹膜炎の検討

岩谷 昭・高橋 聡・島田 能史

小林 康雄・須田 和敬・丸山 聡

谷 達夫・飯合 恒夫・島山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】大腸穿孔は細菌性腹膜炎から多臓器不

全に陥り，依然救命が困難な症例も少なくない。今回，当院における大腸穿孔症例の臨床的検討を行った。

【対象】1994年1月から2007年12月までで，当院で手術を施行した大腸穿孔症例40例について検討した。

【結果】平均年齢は64.4歳で，穿孔部位はS状結腸が最も多く，術前のCT検査では88%に腹腔内遊離ガス像を認めた。穿孔原因は医原性が最も多く，他には悪性腫瘍，憩室炎，虚血性，炎症性腸疾患の順に多かった。術式は，病変部切除及び人工肛門造設が最も多く施行されていた。術死症例は6例認め，術死症例は，術前白血球数が $3500/\mu\text{l}$ 以下，発症より手術まで12時間以上要した症例が有意に多かった。

【結論】大腸穿孔症例は，早期診断及び早期治療が重要と思われた。重症化が予想される症例では，より積極的な集学的治療が必要と思われた。

9 当科での大腸穿孔性腹膜炎症例の検討

関根 和彦・小林 和明・寺島 哲郎

長谷川 潤・島影 尚弘・岡村 直孝

内田 克之・田島 健三

長岡赤十字病院

【目的】当科における大腸穿孔性腹膜炎手術症例の経過，臨床的特徴について検討した。

【対象】2003年から2007年までの虫垂穿孔を除く大腸穿孔性腹膜炎33例。

【結果】男13例，女20例，平均年齢は67.0歳。糖尿病，高血圧などの基礎疾患は11例に認められ，ステロイド剤を内服している例も4例認められた。穿孔原因は悪性腫瘍が最も多く（11例），他に医原性（大腸内視鏡，洗腸），虚血性，異物（魚骨），憩室炎であった。穿孔部位は左側（下行結腸2例，S状結腸11例，直腸11例）に多く，82%は術前CTで腹腔内遊離ガス像を認めた。術式ではHartmann手術が最も多く施行され（16例），術後死亡例は1例のみであった。平均入院日数は45.7日（最大345日）であり，50日以上長期入院例8例では半数の4例に敗血症/DIC

の重篤な合併症を併発した。

10 最近5年間に当院で経験した大腸穿孔性腹膜炎36例の検討

辰田久美子・河内 保之・牧野 成人
西村 淳・小川 洋・滝沢 一泰
加納 陽介・池崎 寛子・新国 恵也
長岡中央総合病院外科

2003年1月から2007年12月までの5年間に当院で経験した36例の大腸穿孔性腹膜炎について検討した。男性23例、女性13例で、平均年齢は70.3歳で70歳以上の高齢者が6割以上を占めていた。穿孔原因は大腸癌が最も多く12例(32%)であり、次いで憩室炎10例(28%)であった。穿孔部位はS状結腸が17例(47%)で最も多かった。術後合併症としては創感染が最も多く、14例39%の症例に認められた。在院死亡は5例(14%)であった。その原因は、肺炎、MOF、肝不全、ARDSであった。今回の検討で、腹膜炎の術前・術中には癌が指摘されず、術後に大腸癌の存在が明らかになった症例が3例あった。これらの症例について検討、考察を加えた。

11 当院における大腸穿孔性腹膜炎

岡田 貴幸・佐藤 友威・鈴木 晋
青野 高志・武藤 一郎・長谷川正樹
県立中央病院外科

2003年から2007年までに大腸穿孔により腹膜炎

をきたし当院で手術を行った23例について臨床病理学的に検討した。穿孔は肉眼的か病理学的に証明されたものとした。発症年齢は32～92歳で平均74.8歳であり、男女比は11:12だった。原因疾患は、大腸癌と憩室炎が7例(30%)で、特発性・医原性・外傷が各々3例(13%)であった。医原性は2例がCFによるもので、1例がRFAによるものであった。穿孔部位は左側が20例(87%)で残り3例が右側であった。術式はハルトマン手術が13例(56%)、大腸切除が6例(26%)、穿孔部縫合閉鎖が3例(13%)、人工肛門のみが1例(4%)で、60%が二期手術であった。在院死は4例(17%)に認められた。1例は外傷によるもので来院時出血により心肺停止状態であり出血と考えられ、もう1例は退院間近の突然死で誤嚥が原因と思われた。大腸穿孔による直接死亡は2例であったが、予後因子について検討した。

II. 特別講演

日本DMAT, 活動の現状と問題点

— 中越沖地震における活動を中心に —

村上総合病院外科 部長

林 達彦